映画ニッポン浪曲映画「浪曲映画」の再発見

1929年、映画は**無声からトーキー**になったことで、演出の大転換を迫られる。多くの時代劇は人形浄瑠璃や歌舞伎のように、義太夫が節と語りで物語を回す日本の伝統的な演劇形式を踏襲、義太夫に代わる役割を浪曲や琵琶語りに託した映画―**浪曲トーキー、琵琶トーキー**なるものが登場する。

1928年のラジオの全国放送化、SPレコードの本格普及で大ブレイクした寿々木米若の浪曲「佐渡情話」に目を付けた日活が浪曲「佐渡情話」(1934年)を映画化して大成功を収めると、それを契機に各社はあたかも今日の映画界がベストセラー小説やマンガを映画化するように、**浪曲口演付き**や**浪曲・講談演目を脚本とした映画**を次々と製作。**マキノ雅弘の『次郎長三国志』**を頂点として、山中貞雄、成瀬巳喜男、中川信夫、森一生、斎藤寅次郎、三隅研次、加藤泰らも含め、その傾向はTVの登場で急速に人気が衰える1950年代まで続いた。

浪曲は**大衆芸能の王者**として終戦後まで君臨するが、浪曲の物語に通底する義理人情、通俗的で情緒的な価値観は、近代的自我を目指した知識人、夏目漱石、芥川龍之介、永井荷風らに忌み嫌われ、文芸の世界では**「浪花節」という言葉が否定的なレッテル**として最近まで頻繁に使われていた。

しかし、従軍画家を務めたことで戦争協力を問い詰められ、フランスから終生帰国することのなかった藤田嗣治がテープレコーダーに声で残した遺言のなかで、しばしば浪曲の節に乗せて語るほどに、**浪曲は日本人に浸み込んでいた**。

浪曲師・国友忠が「二葉百合子、三波春夫、村田英雄という人たちは、浪曲の自在性を生かし、それぞれ見事に独自の節調を作り上げて成功した、**現代の浪曲家**だ」と書いているように、浪曲は変容しつつも日本人のDNAを受け継いできた。私たちのDNAを探り当てる旅も今回が完結篇となる。

注記　会場は全てユーロライブとなります

1 浪曲　1 映画　公演は「映画＋浪曲」か「映画」の2種類です(各回入替)。浪曲だけの観覧はできません。また、全席指定制ですので予約はお早めに!

6月1日(木)13時より販売開始

ユーロスペース公式ウェブサイト、ユーロスペース窓口にて販売

①映画＋浪曲の回	一般2,400円／学生・会員2,000円／高校生1,200円
②映画のみの回	一般1,400円／学生・会員1,200円／高校生800円
「絶唱浪曲ストリート」	一般1,800円／学生・会員1,200円／高校生800円
回数券(一般のみ)	10,000円(1,000円券10枚綴り)

同伴者との共通使用可。ユーロスペース窓口のみにて、6月10日より発売。
①は1,000円券2枚、②は1,000円券1枚で入場できます。
その際、座席指定券との引換えが必要です。

●学生・会員料金の方は、要証明書提示●浪曲だけの観覧はできません●特別興行につき、シニア料金はありません

◎オンライン・チケット http://www.eurospace.co.jp/

●各種クレジットカードでのみご購入いただけます●ご鑑賞前に劇場ロビーにある専用発売機でチケットをお受け取りください。発券機が混雑する場合もあります。早めのご来場をお勧めします。

6.23 金曜日

13:00 開演 1 **東海道は兇状旅**(いそぎたび)
監督＝久松静児
出演＝藤田進、相馬千恵子、羅門光三郎、東武蔵
1 **安兵衛婿入り**
浪曲＝天中軒雲月　曲師＝広沢美舟
14:55 終了

15:30 開演 2 **新越後情話**
監督＝石山稔
出演＝羽島敏子、宗方規子、逢初夢子、寿々木米若
2 **姿三四郎**
浪曲＝広沢菊春　曲師＝広沢美舟
17:30 終了

18:00 開演 3 **絶唱浪曲ストーリー**
監督＝川上アチカ
出演＝港家小そめ、港家小柳、玉川祐子、沢村豊子
20:00～20:30 終了　対談：川上アチカ × 港家小そめ ※1

※1 18:00の回の入場券が必要です(席は先回優先)

Aプログラム
映画と浪曲師

明治末期に誕生した「映画」は、声を発しない無声映画で、楽団による伴奏や活動写真弁士による「活弁」を伴って上映されていたが、1930年代に入り、声を持つに至る。無声映画における活動写真弁士の役割は、映画製作の最終走者と言ってもよかったことは、『カツベン!』(2019年/周防正行)を見てもわかるが、トーキーの誕生は、別の見方をすれば、「映画」が最終走者を失ったことだとも言える。活動写真弁士の技術と人気を失った「映画」が目をつけたのが、当時大衆芸能の王者として君臨していた「浪曲」だった。SPレコード75万枚を売り上げたという寿々木米若の「佐渡情話」を日活が映画化し(1934年)大ヒットして以来、浪曲映画が次々とつくられるようになる。それは、浪曲ファンにとっては、「劇中に浪曲が流れる映画」ではなく「動く画のついた浪曲」であった。冒頭、浪曲師が画面に登場し、カメラに向かって挨拶をする場面で始まる。テレビのない時代、スクリーンに映される米若や虎造にどれほど集客力があったかは想像に難くない。「浪曲師を見て、浪曲を聴く」　を主眼に映画を見ていた大衆の存在を思い描きながら、今一度、「映画」が大衆娯楽であった時代を振り返りたい。

6.24 土曜日

12:00 開演 4 **月の出の決闘**
監督＝丸根賛太郎
出演＝阪東妻三郎(天堂小彌太)、青山杉作(大原幽学)
3 **紋三郎の秀**
浪曲＝東家孝太郎　曲師＝沢村まみ
14:00 終了

14:30 開演 5 **血斗水滸伝　怒濤の対決**
監督＝佐々木康
出演＝市川右太衛門、中村錦之助、大川橋蔵
4 **天保水滸伝　笹川の花会**
浪曲＝玉川太福　曲師＝玉川みね子
17:00 終了

17:30 開演 6 **天保水滸伝**
監督＝山本薩夫
出演＝平幹二朗、浅丘ルリ子、香山美子
19:54 終了

Bプログラム
天保水滸伝を味わう

「水滸伝」は、もともと中国(明)の小説である。要塞「梁山泊」に結集した108人の豪傑が腐敗したに立ち向かう物語。「水滸」とは「水のほとり」の意味である。「天保水滸伝」は、利根川流域を舞台とし、やくざ者たちが腐敗権力に立ち向かうという、いわば和製「水滸伝」である。時は江戸時代・後期、天保年間(1830年～1844)。天保4年～10年にかけ冷害による大飢饉が起き、人々が米不足にあえぐ中、庶民の不満によって治安が乱れた時代である。東北から江戸へ送られるコメは海上輸送され、銚子から高瀬舟に積み込まれ利根川を上り江戸川を下って届けられていた。「天保水滸伝」は、利根川流域(下総＝現千葉県)に縄張りを持つ実在したやくざ、旧勢力・飯岡助五郎と振興勢力・笹川繁蔵の抗争を中心とした物語である。江戸時代に講釈師・宝井琴凌が創作し、その講談をベースに浪曲がつくられ、さらに数多くの映画がつくられた。「天保水滸伝」を最も大衆に広めたのは二代目玉川勝太郎の浪曲で、昭和40年頃までは、だれもがそのストーリー、登場人物を知って、講談、浪曲、映画を楽しんでいた。史実を下敷きに創作も交え、入り乱れる侠客たちを描いた壮大なサーガである。

6.25 日曜日

12:00 開演 7 **旅笠道中**
監督＝佐々木康
出演＝大川橋蔵、千原しのぶ、三波春夫
5 **忠治関宿**
浪曲＝国本はる乃　曲師＝広沢美舟
14:00 終了

14:30 開演 8 **雲右エ門とその妻**
監督＝安田公義
出演＝三波春夫、浦路洋子、月丘夢路、石黒達也
6 **大前田英五郎　島抜け**
浪曲＝天中軒景友　曲師＝広沢美舟
16:35 終了

16:50～17:40 終了　トーク「三波春夫とは何者だったのか」
玉川奈々福 ＋ 聞き手 田井/堀越 ※無料

18:00 開演 9 **大利根無情**
監督＝的井邦雄
出演＝田村高廣、三波春夫(平手造酒)、近衛十四郎
18:59 終了

Cプログラム
三波春夫 生誕百年

1923年(大正12年)7月19日、現・新潟県長岡市に生まれる。家業の倒産で、13歳のときに家族で上京、寿々木米若に入門を願い出るも断られる。16歳で本郷の「日本浪曲学校」へ入学、翌年には『南篠文若』の名披露興業を行う。以後、少年浪曲家として活躍するが、昭和19年、20歳で帝国陸軍に入営し満州国に渡る。敗戦を同地で迎え、ハバロフスクの捕虜収容所で約4年間、シベリア抑留生活を過ごす。昭和24年帰国。浪曲師として復帰。。妻を曲師として、二人で舞台に立つ。1950年代に入るとTVの普及で娯楽の王様、浪曲に代わって、大衆歌謡(のちの演歌)が流行、中でも民謡歌手から転身した三橋美智也に刺激され、ならば浪曲歌謡をと、1957年に歌手デビュー。三波春夫の誕生である。その後「チャンチキおけさ」など大ヒットを連発するが、彼を“国民歌手”という特別な地位に押し上げたのは「東京五輪音頭」だろう。古賀政男の作曲による公用歌は、実は三橋美智也、橋幸夫、北島三郎、坂本九が歌っているが、人は三波春夫の声でしか記憶にないだろう。浪曲の代名詞、広沢虎造の影すら消えた今、多くの日本人は三波春夫の浪曲歌謡の背後に、浪曲の幻影を感じているのではないか。

6.26 月曜日

13:00 開演 10 **世紀は笑ふ**
監督＝マキノ正博
出演＝杉狂児、轟夕起子、広沢虎造
7 **“お楽しみ”**
浪曲＝富士綾那　曲師＝広沢美舟
15:10 終了

15:40 開演 11 **新佐渡情話**
監督＝清瀬英次郎
出演＝黒川弥太郎、花井蘭子
17:08 終了

17:25～17:55 終了　鼎談：追悼・山根貞男 玉川奈々福/田井肇/堀越謙三 ※無料

18:10 開演 12 **実録 忠臣蔵**
監督＝牧野省三
出演＝尾上松之助、巴うの子(口演)
8 **金魚夢幻**
浪曲＝玉川奈々福　曲師＝広沢美舟
20:05 終了

Dプログラム
フィナーレ―浪曲映画特選

「浪曲映画」という死語となっていた言葉を復活させたのが、「浪曲映画祭」である。当初、浪曲ネタをもとにした映画が多くあることに着目し、映画と浪曲の親和性を浮かび上がらせることを狙いとしたが、実際に劇中に浪曲が流れ浪曲師が登場する、真の意味の「浪曲映画」が存在することを知り、それらを発掘、上映してきた。第一回となった2019年「浪曲映画祭」における最大の発見は、消失したと思われていた『新佐渡情話』のプリントの存在を突き止めたことだった。いったいどんな映画なのか、だれも見たことがない浪曲映画をドキドキしながら試写したが、その時、いらしたのが映画評論家の故・山根貞男さんだった。試写が終わった後の興奮した空気が忘れられない。その時、山根さんが発した一言が「風景に節が流れると、情景になるんだよなあ」だった。これだ。これでやれる。かくして「浪曲映画祭」は始まった。以来、5年にわたり、浪曲をキイワードに、さまざまな映画を上映し、「この企画なしには見られなかった」多くの映画を上映してきた。中でも、浪曲ファン、映画ファンのどちらにとっても最も貴重な映画が『世紀は笑ふ』であることには異論がないだろう。